

『キリストの洗礼』井上隆晶牧師
列王記下2章19～22節、マタイ福音書3章7～17節

①【洗礼祭のアイコン】

洗礼のアイコンを見ると、ヨルダン川を真ん中にして、絵が右と左に分かれているのがわかります。左は洗礼者ヨハネがおり、木の根元に斧が置かれていますから古い「**律法の世界**」を象徴しています。ヨハネは大勢の群衆に「**悔い改めにふさわしい実を結べ。**」（マタイ3：8）と説教しました。ユダヤ人たちは自分たちのルーツであるアブラハムを誇り、自分はその子孫だから特別だと思い、外国人を見下げ、自分たちは変わろうとしませんでした。そこでヨハネは「悔い改めの**大洗礼運動**」を起こしたのです。信仰を持っていることを誇るな！ユダヤ人であろうと、外国人であろうと悔い改めない者は、斧で切り倒されると説教したのです。

そこへイエス様が現れてヨハネから洗礼を受けました。ヨハネは自分の前に現れたイエス様を見て驚き、洗礼を授けるのを辞退しようとして言います。「**私こそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、私のところへ来られたのですか**」（マタイ3：14）。そんなヨハネにイエス様はこう答えられました。「**今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、われわれにふさわしいことです。**」（マタイ3：15）

「正しいこと」とは洗礼を受けることです。主が「**われわれにふさわしい**」と言われた言葉に注目して下さい。イエス様は罪がないのに、罪人の仲間になって下さったということです。もう一度洗礼のアイコンを見て下さい。ヨルダン川の左側が「**律法の世界**」なら、キリストを境として、右側は天使がいる世界ですから「**福音の世界、天国の世界**」を象徴しています。イエス様がちょうど天国へのかけ橋になっているのです。つまりキリストによらなければ、神の国、天国に入れないということです。イエス様は罪のない神の子であり、洗礼を受ける必要がないのに洗礼を受けたのは、ご自分の為ではなく私たちの為でした。いつも私が言っているように、衣服の汚れは水と触れ合うことによって、水の中に転嫁されます。同じように、罪なき神の子キリストと私たちが一体になることによって、私の罪と死は彼に転嫁されるのです。だから彼は私たち人間と共に洗礼を受ける必要があったのです。故にイザヤはこう言っています。「**私の僕は、多くの人が正しい者とされるために彼らの罪を自ら負った。**」（イザヤ53：11）「**私たちの罪をすべて主は彼に負わせられた。**」（同53：6）

②【洗礼はキリストと一体となる式】

そのキリストと一体となる式を洗礼式と言います。その時、私の罪が主に転嫁されます。ヨハネは自分がしている「**水による悔い改めの洗礼**」（3：11）とは違う、新しい「**聖霊と火の洗礼**」（3：11）が始まると預言しました。洗礼も過越祭のパン裂きも、もともとユダヤ教の儀式でしたが、イエス様はそれをご自分が体験さ

れることにより新しいものに変えられたのです。すなわち、ヨハネの悔い改めの水による洗礼と聖霊を降す洗礼を一体にされたのです。イエス様がニコデモに「**だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることが出来ない。**」(ヨハネ 3:5)と言われた洗礼です。水によって古い人を葬り去り、同時に聖霊によって新しい人を創造する新生の儀式へと変えられたのです。洗礼盤の中で、キリストに起こった死と復活が私たち人間に再現されるのです。三度水を頭にかけることは三日間の葬りを意味し、水から上がることは復活を象っているのです。

●エルサレムのキュリロスは 348 年に聖墳墓教会で、洗礼志願者にこう説教しました。「**三回水に浸かり、また水から上がりましたが、それでキリストの三日間の埋葬を暗に象徴していたのです。…あの救いの水はあなたがたにとって墓であり母の胎でもあったのです。…何と奇妙で不思議なことがあります。私たちは本当に死んだのでもなく、本当に墓に入ったのでもなく、本当に十字架に架けられて復活したのでもありません。しかし模倣がかたどりにすぎないとしても、救いは真実なのです。**」

イエス様が洗礼を受けた時、天が開け、聖霊がイエス様の上に降り、天から父なる神様の声がしました。「**これは私の愛する子、私の心に適う者**」(3:17) 聖霊がイエス様の上に降ったのは、イエス様が自分と同じ性質の神であることを教えるためであり、鳩の姿で現れたのはノアの洪水を思い出させるためでした。その昔鳩はノアのもとにオリーブの葉を運び、洪水の終わりを告げました。今、聖霊はイエス様の上に降り、イエス様こそ世界の難破を救う者、神の国の新しいいのちであることを証しました。マタイも「**天がイエスに向かって開いた**」(マタイ 3:16)と書いています。閉じていた天が再び開き、神は人の祈りに答えられ、天と地はつながりました。人はキリストを通して神との対話、神との交わりが始まったのです。キリストと一体であるあなたの上にも天は開いているのです。

③【この世の様々な思いがけない出来事を恐れてはならない】

元旦に能登半島で大地震があり 200 名以上の方が亡くなりました。2 日は羽田で飛行機事故がありました。これがこの世です。元旦から死はやってきます。いくら人間が気をつけても限界があります。信仰していても何でも起こると思わなければなりません。「なぜ?」と聞いても答えはありません。人間の罪と死によってこの世は歪んでいるからです。

パウロはこう書いています。「**あなたがたはキリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。…地上のものに心を引かれないようにしなさい。あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。**」(コロサイ 3:1~4) 復活とは、来世のものではありません。キリストと一体になった時から復活は始まっています。私の命は地上にはありません。神の元に隠されているのです。私た

ちはもうこの世に死んだのです。それなのに、この世に死んだことをすっかり忘れて、まだこの世の中に根を張り、この世のことで心配しては心を煩わせ、恐れています。死人は何も恐れませんが、何もできません。

●プロテスタントの作家である椎名麟三という人は、いろいろと求めて回り道をして最後にキリスト教に救いの道を見い出して洗礼を受けました。その時、彼はカトリックの作家である遠藤周作に「遠藤さん、これで私は虚空をつかみながら、ジタバタして死んでゆけますわ」と言いました。どういう意味かという「自分のすべて、裏も表も見せて、大きな神様にすべて任せることができた。」という意味だと遠藤周作はコメントしました。

裏も表も見せても大丈夫という事です。私とキリストとの一体の絆はものすごい強いものがあるのです。私の罪などでは、ほどけない、私の死があってもほどけないのです。キリストの愛と赦しと命の方が大きいからです。ガエタノ・ピッコロという人が「洗礼というのは主人が変わることだ」と言っています。以前、私たちは「律法」という主人のもとで生きていました。律法（神の戒め）によれば、私たちは失格者であり、天国に入れません。でも私を支配される方が変わったのです。キリストに結ばれ、キリストの愛と赦しの支配下に私は置かれました。キリストが私の主人になったのです。夫になったのです。だから法則が変わったのです。キリストの愛が新しい律法なのです。古い律法は自分に心が向いています。自分はちゃんとできるだろうか、罪を犯したら愛されないのじゃあないか、いつも自分がどうかを見るのです。そして「私はちゃんとやって来た」と自分の行いに頼るのです。一方福音はキリストの愛に興味があるのです。心はキリストに向いているのです。キリストの愛が分かって、肩の力が抜け、愛されるままに委ねることです。キリストと一緒になら、地獄でも怖くないのです。信仰とはキリストに惚れることです。

先日も人事部委員会で話している時、ある人が「いったいコロナって何だったのかね。あんなに怖がって！」と言っていました。本当にそうです。教会が死を恐れ、病を恐れ、喜びがなかったら証しになりません。だから災害だけでなく、病も怖がらないで欲しいのです。異常に恐がる人がいます。恐れ過ぎるとコロナを偶像化することになります。キリストの方がコロナより弱いと思っているという事だからです。神はウイルスをも創造しました。マスクの弊害が出ています。消毒し過ぎて、保育園の子供たちが他の病気にどんどん罹っています。恐れず、すべてを受け入れることが大事です。人生はあっという間に終わります。私たちはキリストによって生きているのです。自分の力で生きることを辞めたのです。ですから、この世を恐れてはなりません。「あなたがたの内におられる方は、世にいる者よりも強いのです。」(Iヨハネ4:4) 信仰をしっかりと持ちましょう。